

学位論文題名

石刃および石刃製石器に関する研究

－北海道十勝平野の資料を中心に－

学位論文内容の要旨

日本における石器研究は、その概念の多くを西洋より輸入し、国内資料へ適応させる形で発展させてきた。考古学資料という地域性を強く反映した資料に対して、一方で広く地球規模で普遍的な用語や概念を適用させる試みは、共通の分析基準を確立させるという研究資料の客観化・普遍化とともに、地域的特色への適応を図るが故に当初の定義や概念を変容させるという状況も生み出してきた。さらに近年では、考古学研究者の視点や資料の理解の過程においてそれぞれの帰属する国家や社会の時代的背景が及ぼした影響について考慮する必要性が指摘されている。本論文は、日本の石器研究において特に時代性を反映した用語として用いられている石刃について、その用語導入の起源、用例の時代的变化をたどり、その用語のもつ時代性や社会的影響について考察したものである。また加えてその用語と概念が規定する地域性の問題が近代国家の領域概念と深く関係すること、またその影響が研究者自身の資料に対する時代的位置づけや、空間的領域性を規定している点を指摘し、とくに北海道における石刃資料やその製作技術が一般的な概念の枠を超えて存在すること、従来の概念規定ではその歴史の実像を正確に評価しきれない現状を自ら調査した資料を基礎として鋭く指摘したものである。

考古学は、物質資料にもとづいて議論される学問であるが、その研究行為を規定する概念の歴史性を反証することから、実態を正確に反映しない要因の背景に研究者のア priori な資料に対する認識や定義が存在することを、資料を用いて検証した点にその特徴がある。また資料分析においては、変形論や使用痕分析をもちいた機能論を多用し、技術組織論的観点からの技術論の考察を含めるなど、方法論的にも従来の方法論の特性と限界とを検証する結果となっている。本論文は、従来の石器研究のもつ課題を明示するとともに、これらの課題点を乗り越えようとする近年の石器研究の新たな取り組みの一角に位置づけることができる。

本論文は、第1部(第1章から第4章)と第2部(第5章から第10章)とに分かれる。第1部においては、石刃という石器研究を象徴する石器製品をめぐる用語定義の起

源、またそれに付随する技術論の視点やひとつの石器から連想される民族概念にまで論を進め、日本における考古資料の研究と近現代の社会思想の変遷とに関わる学史的議論をおこなっている。第2部においては、自ら発掘調査してきた一次資料を基礎として、北海道十勝平野における石刃を製作する技術の実態と時間的変遷を提示し、学会における一般的な認識の枠を超えた資料の実態を詳述し、資料捜査の方向性を提起している。

第1章は、石器研究または石器時代研究の言説を主たる対象として、日本人考古学者の石器に代表される考古資料にたいする議論のなかに自らの民族集団としての日本人という意識がどのように影響をあたえているのかについて日本国家の領域の歴史的变化と併せて検討を加えている。

第2章では、とくに石刃という日本人考古学者が帝国の領土の拡大とともに進出した大陸でのフィールドワークを通じて導入（輸入）された概念の国内資料への適用過程を東方考古学会に参加した駒井和愛、江上波夫、八幡一郎、ヨーロッパ留学を通じて石器研究を日本へ輸入した大山柏らの言説の検討を通じて考察している。また1945年の敗戦以降の新たな石器研究の展開の動きの中で石刃および細石刃の名称、用語定義の変遷を渡辺仁、杉原荘介、佐藤達夫、大井晴男、芹沢長介、山中一郎など言説を中心にとりあげ批判的に考察している。

第3章は、石器研究において不可欠な技術概念、技術の認識について三枝博音を中心とした唯物史観にもとづく技術思想との関わりに端を発し、1980年代以降に主として北米から輸入されるプロセス学派の技術組織論の動きとその影響、フランスの古民族学派を代表するルロワ・グーランのシェーンオペラトワール（動作連鎖）研究の近年の再評価の動きを論じている。加えて、これらの石器研究における技術論の展開の先に生じる技術と型式の内在する課題を提示している。

第4章では、再度石刃をめぐる問題に論を戻し、その一般的認識および地域的変異について論じている。日本における石刃の理解が旧石器時代および更新世に特有の石器技術と認識されているのに対し、北海道においては、更新世以降の完新世においても連続して使用される技術であること、またこの傾向が広くユーラシア各地に共通する現象であり、日本国内での定説的理解が逆に地域的変異とみなされることを指摘している。結果として先の章において検討してきた考古資料に対する概念規定がその議減とは別に特定の国家や学問的コミュニティの中で使用されていく中で、普遍性から逸脱し、特定の時代性や領域性を付加されていく現状が明らかにされている。

第5章は、具体的に資料分析をおこなった北海道地域の考古学的様相について論じたものである。十勝平野地域の考古資料の変遷を提示する中で更新世と完新世初頭の間に先史文化の不連続性が存在することを、実資料をもとに提示する一方で、石刃という石器技術とその産物が二つの時期を通じて継続する対立的状況を指摘している。

第6章は、十勝地域の考古資料を地理的環境および石器石材の環境を含めて概観したものである。

第7章は、道具として利用される石刃の実例を形態学的観点および使用痕分析を通じた昨日論的観点より考察したもので、二次加工をともなう石刃素材の削器や搔器と比較検討することで石刃そのものが特定機能を有する道具として利用されていたことを実証的に示している。

第8章では、完新世の遺跡から出土する石刃素材の彫器をとりあげ、使用状況の復元から従来の技術形態学的検討による評価とは異なる利用状況を明らかにしており、道具の機能認定及び器種設定に関する新たな課題を提起している。

第9章は、更新世の遺跡から出土した石刃製彫器を取り上げ第8章において検討した結果をふまえ、機能的復元を試みたものである。

第10章では、第5章以下で展開してきた十勝地域の出土資料によって明らかにされた石刃および石刃製石器の具体的な運用事例を基礎として、当該地域における石刃運用の背景についての仮説提示をおこなっている。

本論のまとめとしての結語においては、本論において提起されてきた課題的を整理するとともに、石刃という分析資料を通して検討された研究者の分析対象に対する認識の客観性についての一つの方向性が提示されている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 加 藤 博 文

副 査 教 授 小 杉 康

副 査 准教授 吉 開 将 人

学 位 論 文 題 名

石刃および石刃製石器に関する研究

－北海道十勝平野の資料を中心に－

本論文についての審査は、提出された論文を審査委員がそれぞれ精読し、計5回の審査委員会と、申請者への口述審査を経て実施した。

申請者は、申請論文を第1部（第1章から第4章）と第2部（第5章から第10章）とに分けて、日本における考古資料の研究と近現代の社会思想の変遷とに関わる学史的議論について、および自らが調査分析した資料を資料の提示する人間と環境との相互作用の産物として再評価している。第1部においては、研究と近現代の社会思想の変遷に関わる学史的研究の俎上に「石刃」という石器研究を象徴する石器製品をめぐる用語定義の起源、またそれに付随する技術論の視点やひとつの石器から連想される民族概念にまで論を進めている。第2部においては、自ら発掘調査してきた一次資料を基礎として、北海道十勝平野における石刃を製作する技術の実態と時間的変遷を提示し、学会における一般的な認識の枠を超えた資料の実態を詳述し、資料捜査の方向性を提起している。

申請論文においては、1) 資料分析に反映される研究者の意識と視座に内在する課題、2) 本州以南とは異なる北海道島における先史文化の独自性の具体的資料に即した提示、3) 列島内の文化的多様性を単一の時期区分と枠組みでは正当に評価できない状況、これらを明示することに成功していると評価することができる。

日本における石器研究の成立と展開に関わる学史的研究の領域は、先行研究も膨大であり、十分な検討はこれまでなされてこなかった。特に戦前の大陸での調査研究の展開が戦後の研究へ与えた影響を検証しようとした試みは、斬新であり今後のこの領域の研究の進展に貢献したものとして評価できるものである。

一方で、戦後の石器研究を牽引した「石器文化論」や「石器構造論」などを全面的に否定するような記述が見受けられるが、その評価の正当性を担保するために必要な十分

な基礎資料の提示がなされておらず、根拠希薄の感が否めない結果となっており、これらは今後の課題となろう。

しかしながら、これらの点を考慮しても、本論文の提起した視座の斬新さ、分析内容の価値は、極めて高いと判断することができる。

審査委員会は、提出された申請論文を慎重に審査し、また口述試問等を実施して、十分に審議をかさねた結果、以上にのべたような本論文の評価に鑑み、全員一致して、山原敏朗氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達した。